

実践報告

小学校キャリア教育の展開に資する小大連携・小高連携の試み —児童の「基礎的・汎用的能力」「自己肯定感」「学習の効力感」の向上をめざして—

相良 誠司^a 児玉 清孝^b^a福岡女学院大学 sagara@fukujo.ac.jp^b福岡市立弥永小学校 kodama.k01@city.fukuoka.lg.jp

要約：学習指導要領の改訂にあたり、キャリア教育の視点から小・中・高等学校のつながりが明確になるよう整理することによって、小学校特別活動の学級活動(3)が新たに設けられた。これまで特に特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校においては、キャリア教育が体系的に行われてこなかったという課題があった。福岡市立弥永小学校は、令和3年度から小学校段階からのキャリア教育に関する実践研究を開始している。これまで小学校においてはあまり取り組まれていなかった小大連携・小高連携を試み、児童の「基礎的・汎用的能力」「自己肯定感」「学習の効力感」等に、大きな成果をあげている。本稿では、福岡市立弥永小学校が、小学校のキャリア教育を展開するにあたり、成果をあげた小大連携・小高連携の実践例を報告する。

キーワードキャリア教育
小大連携
小高連携
総合的な学習の時間
外国語・外国語活動
基礎的・汎用的能力
自己肯定感
学習の効力感

1. 問題の背景と報告の趣旨

(1) 小学校キャリア教育に求められること

平成18年に改正された教育基本法には、教育の目標として「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が盛り込まれ、平成19年に改正された学校教育法には、義務教育の目的として「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うこと」が規定された。

平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」には、「キャリア教育は、(中略)幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である。その中心として、(中略)基礎的・汎用的能力を、子どもたちに確実に育成していくことが求められる」「小学校においては、社会生活の中で自らの役割や、働くこと、夢を持つことの大切さの理解、興味・関心の幅の拡大、自己及び他者への積極的関心の形成等、社会性、自主性・自律性、関心・意欲等を養うことが重要である」と記されている。学校間・異校種間の連携については、「発達の段階に応じた体系的なキャリア教育の充実を図るには、学校種間の円滑な連携・接続を図ることが重要である」とも記されている。

また、平成29年に告示された小学校学習指導要領総則には、「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と記されている。学習指導要領改訂にあたり、キャリア教育の視点から小・中・高等学校のつながりが明確になるよう整理することによって、小学校特別活動の学級活動(3)が新たに設けられた。総則解説には、小学校のキャリア教育の課題として、「これまで学

校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場面が曖昧にされてしまい、また、狭義の進路指導との混同により、特に特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校においては、体系的に行われてこなかったという課題もある。また、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、働くことの現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある。こうした指摘等を踏まえて、キャリア教育を効果的に展開していくためには、特別活動の学級活動を要としながら、総合的な学習の時間や学校行事、道徳科や各教科における学習、個別指導としての教育相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になる。」と言及している。

さらに、令和4年に刊行された小学校のキャリア教育の手引きには、「各学校において目の前の児童の現状を踏まえ、必要とされる能力を意図的に育成していくことが求められる。(中略)各学校において、キャリア発達の課題を明確にし、キャリア教育を通して身に付けさせたい能力を設定するためには、児童の現状を把握する必要がある。その際には、現状を数値化して把握する『定量的な把握』と、数量的な計測結果には現れにくい質的な側面について把握する『定性的な把握』の双方が不可欠である」と記されている。

加えて、令和5年の第4期教育振興基本計画では、各学校段階を通じた体系的・系統的で、学びと将来とのつながりを見通すことができるキャリア教育の重要性や地域等と連携した教育活動の充実(ステークホルダーの活用)が強調されている。

以上の法律・答申・学習指導要領・手引き等の記述を踏まえると、小学校のキャリア教育において、以下の点が求められていることが読み取れる。

- ①基礎的・汎用的能力などの必要な資質・能力の育成につなげていく指導を行うこと。
- ②進路に関連する内容が存在しない小学校において、キャリア教育を体系的に実施すること。
- ③各学校が、「定量的な把握」「定性的な把握」双方を踏まえて、児童の現状について分析し、身に付けさせたい能力を設定すること。
- ④学校種間の円滑な連携・接続を図ること。
- ⑤特別活動を要しつつ、総合的な学習の時間や各教科における学習など、様々な機会を通じて、計画的・組織的に実施すること。

(2) 本校の実践の特長

福岡市立弥永小学校(以下:本校)は、令和4年度~令和5年度に福岡市教育委員会の授業改善推進モデル校の研究指定を受け、研究主題を「自尊感情を高め、自分の明るい未来を創造できるキャリア教育の推進」とし、小学校におけるキャリア教育の先進的な実践研究を推進している。

本校では、(1)で挙げた①については、基礎的・汎用的能力を、小学生にも理解できる平易な言葉で「伝える力(人間関係・社会形成)」「やりとげる力(自己理解・自己管理)」「やりなおす力(課題対応)」「見通す力(キャリアプランニング)」として整理するとともに、発達段階を踏まえ各学年の目標として具体化している。②については、各学年1~3学期を通じて、キャリア教育の体系的・系統的なカリキュラムを作成し、そのカリキュラムをもとに実践を積み重ね、記録を累積してきている。③については、令和4年度~令和5年度の実践研究において、自尊感情の高揚など児童の非認知能力の育成に力を入れてきた結果、落ち着いて学校生活を送るなど一定の成果が見られている。一方、児童質問紙から「学びの意味や将来とのつながりに見通しが持てないこと」「身近なロールモデルの不在」「学習性無力感」「自己肯定感の低さ」などが新たな課題として明らかになっている。その結果を踏まえて、今回の小大連携・小高連携の試みがなされている。④⑤については、本校においては、一般に小学校でなされている地域連携・小中連携・小小連携にとどまっていない。キャリア教育の本来の目的を踏まえ、小大連携・小高連携へと広がりを見せている。⁽¹⁾ 小学校における外国語活動や総合的な学習の時間での小大連携・

小高連携は、小学生が自らのキャリア形成について長期的な展望を持つことができるという点から、新たな学校種間連携の形として位置付けられよう。以下、本校校長が、小学校キャリア教育の展開に資する小大連携・小高連携の試みについて、報告する。

2. 本校のキャリア教育の試み

本校は、令和3年よりこれまでの教育活動を再整理し、「キャリア教育＝人生教育」ととらえ、小学校段階からのキャリア教育に関する実践研究を開始した。研究主題を「自尊感情を高め、自分の明るい未来を創造できるキャリア教育の推進」とし、目的や発達段階に応じて、外部人材を活用しながら教科等横断的な視点でカリキュラムを編成し、実践研究を積み重ねてきた。ここでは、令和3年度から令和6年度前半までの実践研究及び小大連携・小高連携の試みを中心に報告する。

(1) キャリア教育の目標設定

キャリア教育の目標は、「基礎的・汎用的能力」の4つの技能として整理されているが、その実施にあたっては、各学校の児童たちの実態に応じて作成するものとなっている。本校では、まず、教職員間で児童の実態からめざす児童の姿を洗い出し、各学年の発達段階に応じて整理することを試みた（図1）。

そして、集約したものを簡潔な全体目標と発達段階を踏まえた各学年の目標に再構成し、図2のようなキャリア教育目標を設定した。

(2) キャリア教育カリキュラムの作成

キャリア教育カリキュラムは、学年単位で作成し、教職員間の検討を通して完成した。作成にあたっては、まず、そのカリキュラムでめざす児童の姿を描き、その実現のために総合的な学習の時間、生活科、行事などの核となる教科（主単元）を定め、関連させる教科、道徳、学級活動等を位置付けた。そして、各単元でめざす児童の姿に応じた具体的な活動・招聘する外部講師・体験活動等を構想し、学習の順序性や相互関係性を矢印等で示した（図3）。このカリキュラムは、各学期に1カリキュラムを作成し、実践記録としてまとめ、次年度に引き継げるようにした。



図1 .目標設定

基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成	自己理解・自己管理	課題対応	キャリアプランニング
キャリア目標	伝える力	やりとげる力	やり直す力	見通す力
低学年	気持ちを伝えようとする	何でもやってみる	やりなおしてみる	明日の自分の姿を想像する
中学年	気持ちや考えを伝える	苦手なことでもやりとげる	やりなおす	1年後の自分の姿を想像する
高学年	気持ちや考えを工夫して伝える	目標を決めてやりとげる	原因を考えてやりなおす	将来の自分の姿を想像する
弥永ライダー (本校の教育キャラクター)	シンライダー (心の教育) 	オサライダー (学習指導) 	トライダー (生活指導) 	フライダー (キャリア教育) 

図2 .キャリア教育目標

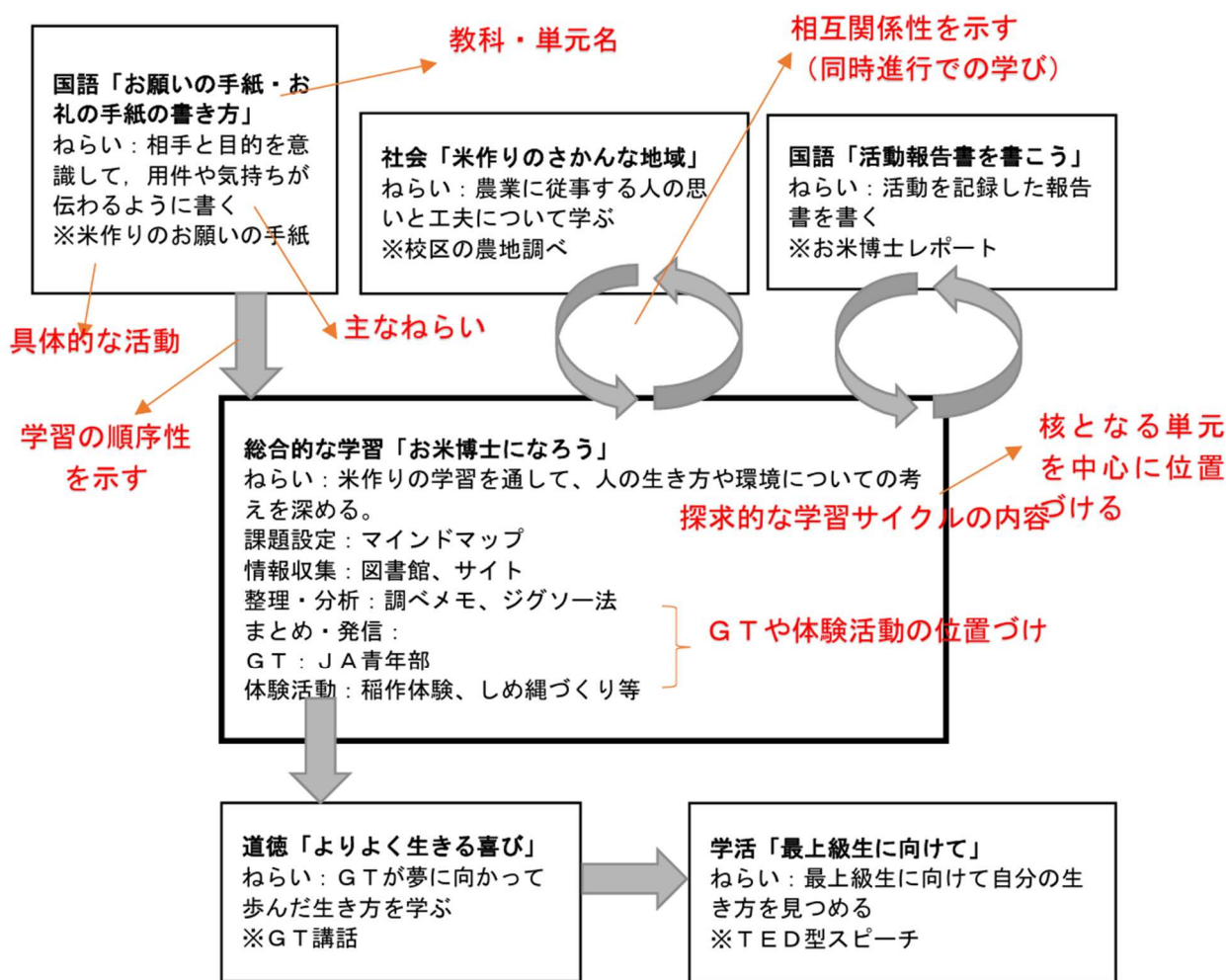


図3 .キャリア教育カリキュラム

(3) 小大連携の試み

1) 総合的な学習の時間「I LOVE 自分」での連携
ア 大学生との対話交流「キャリアジョイント」

福岡女学院大学人文学部相良誠司教授との連携のもと、令和3 年度から始まった本校高学年児童と福岡女学院大学大学生との対話交流（キャリアジョイント）を本校のキャリア教育カリキュラムに位置付け、継続して実施している。大学生との対話では、児童2 名に大学生1 名が対応する少人数制で、大学生生活に関する質問や将来の夢を語り合う機会とした（図4）。この活動を通して、児童は大学での学びのスタイル・アルバイトや奨学金等で過ごす生活スタイルをより具体的にイメージすることができた。特に大学生活が身近ではない児童にとっては新鮮な刺激となった。表1 は、対話交流を終えた児童の感想である。



図4 .対話学習の様子

表1 対話交流を終えた児童の感想

「大学生と話すととても分かりやすかった。今から大人になるまで何をするのが分かった。大学では好きな勉強ができる。アルバイトもできる。」
「10年後の自分を想像することができた。私も将来の夢について今自分にできることをやっていかないといけないと思った。」
「私は大学生の話聞いて、自分の将来の夢は絶対に捨てるのはいけないんだと思った。私もその大学生みたいに将来の夢は捨てずに実現に向かって生きていきたい。」

(令和4年4月12日)

イ 大学教授に学ぶミニプレゼン講話

プレゼンテーションの指導に定評のある、福岡女学院大学人文学部浮田英彦教授との連携も進めた。令和5年度は、キャリアジョイントの一環として、浮田教授にミニプレゼン講話をお願いし、6年生児童にプレゼンテーションの基礎を学ばせる機会を設けた(図5)。講話では、相手の心に響く丁寧な伝え方や「ナンバリング」「キュー(間)」などの具体的なテクニックを、演習を交えて分かりやすくご指導いただいた。児童は、この学びを小学校でのプレゼンテーション作成に生かすなど、プレゼン能力を向上させた。この講話に触発され、福岡市が主催するICTコンテスト(プレゼン部門)や福岡女学院大学が主催する「夢語りコンテスト」への参加を希望する児童が増え、工夫を凝らしたプレゼンを自力で作成したり、仲間と協力して発信力を高めたりする姿が見られるようになった。これらのコンテストでは、参加児童が見事「審査委員特別賞」や「優秀賞」を受賞した。児童たちの意欲や自信を高めることにつながったと考える(図6)。



図5 .プレゼン講話の様子



図6 .プレゼンコンテストの様子



2) 外国語活動での連携

ア 大学生ゲストティーチャーによる外国語活動

令和5年度からは、福岡女学院大学国際キャリア学部平田恵理准教授の協力のもと、大学生ゲストティーチャーによる外国語活動の交流を開始した。1学期は4年生、2学期は3年生がそれぞれ1単位時間、大学生から指導を受ける授業を行った。大学生は、各ユニットのねらいに合わせた創意工夫を凝らした活動を取り入れ、児童たちの学習意欲を高めた。児童たちは、いつもとは異なる学習環境の中で大学生との交流を楽しみ、外国語活動に対する興味関心を高めた(図7)。交流後に、大学生からの温かいメッセージが届けられ、今後の交流への期待が高まった。大学生の中には、本校担当の学生ボランティアも含まれており、多面的な連携につながっている。

図7 .大学生による外国語活動の様子

イ 英語教育に関する研修会

令和6年8月、福岡女学院大学において、小中学校の教職員を対象とした英語教育に関する研修会（福岡女学院大学教職支援センター主催）が開催された。本校教諭（外国語専科：支援加配兼務）が研修会の一部として試行授業を担当し、4～6年生の児童7名が自主的に試行授業に参加した。そのうち5名は、過去に大学生ゲストティーチャーの授業を経験した児童である。大学との外国語活動の連携が、児童たちの外国語学習への意欲向上に影響を及ぼしていると考えられる（図8）。



図7 .大学生による外国語活動の様子

(4) 小高連携の試み

福岡女学院大学人文学部相良誠司教授に高等学校との連携について相談したところ、近隣の福岡女子商業高等学校柴山翔太校長を紹介いただいた。早速、柴山校長に打診をし、了解をいただき、小高連携がスタートした。福岡女子商業高等学校との連携では、本校の卒業生による先輩講話・プレゼン指導・授業サポート等、様々な試みを進めている（図9）。特に、教職志望の高校生を本校で数日受け入れる「高校生サポーター制度」（高等学校側は学生インターシップ制度として位置付けている）を確立できたことは、教員志望者が減少する中、教員確保につながる取組となると考えている。このように、本学のキャリア教育は、小大連携から発展し、小高連携にまで広がりを見せている。



図8 .英語教育研修会の様子

4. 小大連携・小高連携を位置付けた本校キャリア教育の効果

(1) 基礎的・汎用的能力、自己肯定感、学習の効力感の向上

まず、キャリア教育の目標に関する評価について述べる。過去2年間の比較では、育みたい基礎的・汎用的能力の全てにおいて、向上が見られた（表2）。目標を明確にし、教科等横断的なカリキュラムの実施・外部講師招聘授業・体験活動等を積み重ねた結果、児童が4能力の向上を実感していると考えられる。児童の感想からは、高校生との協働学習を通して、挑戦してやりとげる力が高まったという自覚が読み取れる（表3）。



図9 .福岡女子商との連携

表2 . キャリア教育目標に対するアンケートの比較（4件法による肯定的回答割合）

対象	内容	R4 (%)	R5 (%)	比較 (%)
全校児童	伝える力	73	76	+3
	やりとげる力	84	89	+5
	やりなおす力	82	89	+7
	見通す力	83	87	+4

表3 6年生児童の感想

6年生になってからたくさんの人たちと関わるようになった。例えば女子商の先輩には「挑戦を楽しめ」と言われたので友達とプレゼンコンテストに応募するなど、初めてのことに挑戦し、結果を出すことができた。何でもやってみようという気持ちで生活するところが成長したと思う。(令和5年3月)

次に課題であった自己肯定感と学習の効力感について述べる。全国学力学習状況調査の結果を令和3年と令和6年とを比較したところ、自己肯定感と学習の効力感を示す項目において、大きな伸びが見られた(表4)。児童の感想や具体的な行動、質問紙の結果から、新たに小大連携・小高連携をキャリア教育に取り入れたことが成果につながったと考える。

表4. 全国学力学習状況調査における質問紙の回答(本校児童:R3とR5の比較)

対象	内容	①	②	③	④	肯定回答集計(①+②)
6年生(R3)	自己肯定感	20.0	40.0	24.0	16.0	60.0
(R6)		43.2	43.2	10.8	2.7	86.4(+26.4)
(R3)	学習の効力感	61.0	19.0	12.0	8.0	80.0
(R6)		79.8	16.2	4.1	0.0	95.95(+15.95)

①:あてはまる ②:どちらかというにあてはまる ③:どちらかというにあてはまらない ④:あてはまらない

(2) 外国語に関する興味関心の向上

令和5年度の全国学力学習状況調査では、外国語に関する項目で、本校児童が全国平均を大きく上回る結果が見られた(表5)。外国語・外国語活動の担当を専科教員にしたことに加え、福岡女学院大学との外国語活動での連携を試みたことが成果につながったと考える。

表5. 全国学力学習状況調査における質問紙の回答(R5全国児童と本校児童の比較)

対象	内容	①	②	③	④	肯定回答集計(①+②)
6年生(全国)	英語の勉強は好きか	38.6	30.7	18.2	12.5	69.3
(本校)		64.3	23.8	7.1	4.8	88.1(+18.8)
(全国)	将来英語を使いたい	28.9	23.6	28.5	18.9	52.5
(本校)		42.9	31.0	16.7	9.5	73.9(+21.4)

①:あてはまる ②:どちらかというにあてはまる ③:どちらかというにあてはまらない ④:あてはまらない

5. キャリア教育の展開に資する小大連携・小高連携の試みを振り返って

本校の小大連携・小高連携は、児童が将来を展望して、「伝える力」「やりとげる力」「やりなおす力」「見通す力」を高めることに資する新たな試みであった。この小大連携、小高連携の試みは、全国的にも稀有な取組であったことから、令和6年3月に、福岡市教育委員会の推薦を受け、結果的に文部科学大臣表彰を受賞することにつながった。図10は、小大連携・小高連携をしていただいた関係者に報告した際の様子である。

校長として、ヒロガル弥永の「人生道場」(主に6年



図10: 文部科学大臣表彰の報告

生を対象にした、人生の先輩のキャリアから学ぶ講話)、ツナガル弥永の「連携教育」(様々な機関と連携した教育活動2)として整理していたもの(図11、図12)を、これまでの実践研究を総括して、令和6年度より、本校の学校経営方針(ススム弥永のschool compass)に、特色ある教育活動として改めて位置付けた(図13)。



図 11：ヒロガル弥永の「人生道場」



図 12：ツナガル弥永の「連携教育」

令和4 年内閣官房教育未来創造会議「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について(第一次提言)」には、大学教育の在り方とともに、初等教育段階から課題発見・解決能力の育成をめざし、家庭環境や周囲の大人の考え方等によって子どもたちが夢と志に挑戦する機会が失われることがないように全ての子どもたちの可能性を最大限に引き出す「そろえる教育」から「伸ばす教育」へ転換することが提言されている。また、校長がリーダーシップを発揮し、地域の実情に応じた効果的で特色ある教育活動を展開することが期待されている。新たなキャリア教育の展開に向けて、本校が近隣の大学や高等学校と連携という試みを推進したことは、この提言で謳われている内容に合致するものと考えられる。

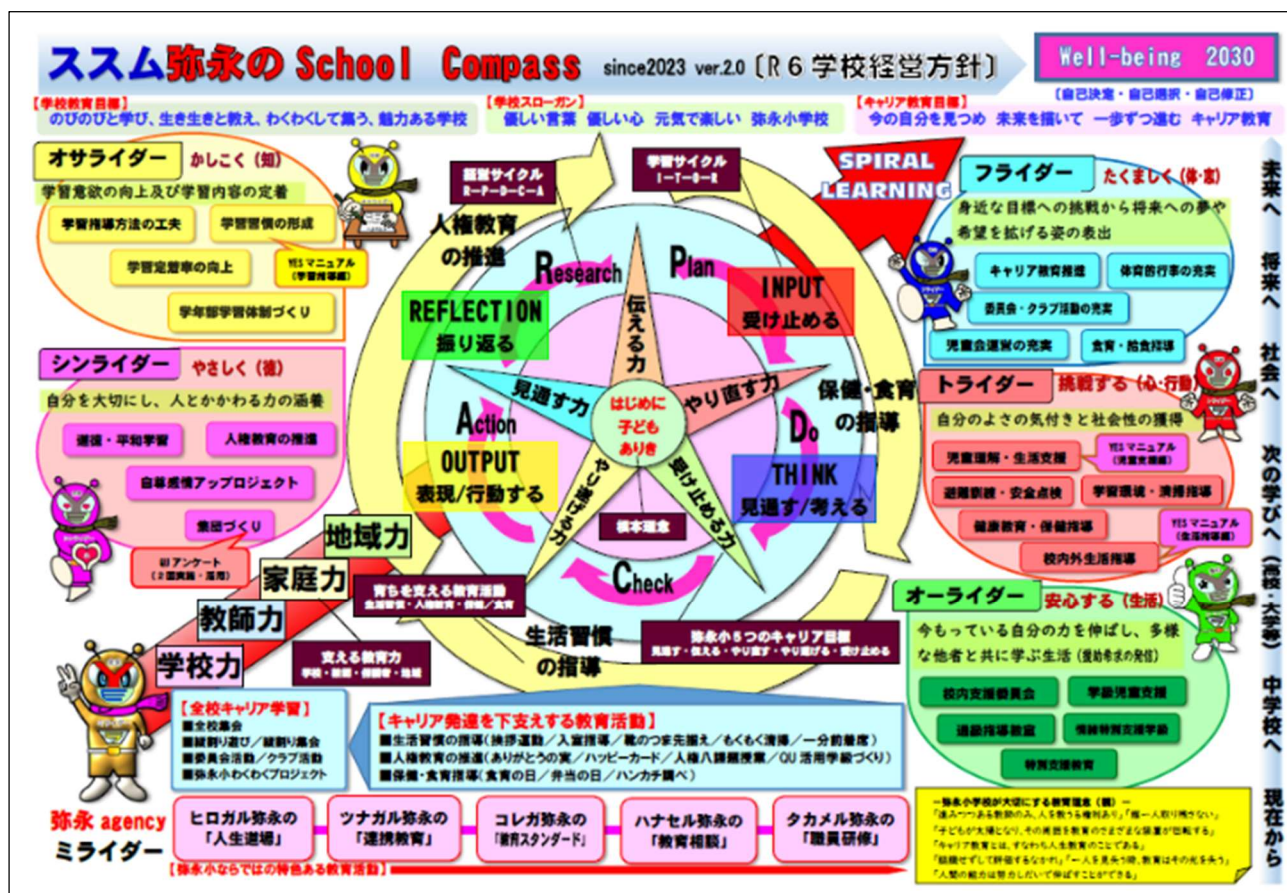


図 13：令和 6 年度学校経営方針

註

(1) 管見の限り、キャリア教育における小大連携について言及している文献としては、以下に示したものだけである。筆者は、「筆者と当時のA小学校の6年担任教師との何気ない会話がきっかけとなり計画された。すなわち、教育内容を明確に言語化し共有できないまま、何かしら意義がありそうだという直観のもとに行われた」と述べている。阿部 学 (2016)。「【研究ノート】小大連携によるキャリア教育についての一試論—教育内容が明確でない実践に意義はないのか—」 千葉大学 人文社会学研究第 23 号 p283~291.

参考文献

文部科学省 (2006)。「教育基本法」
 文部科学省 (2007)。「学校教育法」
 文部科学省 (2011)。「中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」」
 文部科学省 (2022)。「小学校キャリア教育の手引き」
 文部科学省 (2023)。「第4 期教育振興基本計画」
 文部科学省 (2017)。「【特別活動編】小学校学習指導要領解説」
 文部科学省 (2017)。「【総合的な学習の時間編】小学校学習指導要領解説」
 文部科学省 (2017)。「【外国語活動・外国語編】小学校学習指導要領解説」
 藤田晃之 (2014)。「キャリア教育基礎論」実業之日本社
 藤田晃之 (2019)。「キャリア教育フォービギナーズ」実業之日本社

世田谷区立尾山台小学校／長田徹（2019）．「小学校だからこそ！ キャリア教育！」実業之日本社
内閣官房教育未来創造会議担当室（2022）．「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第1次提言）」